

「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

| | |
|-----|-------------------------------------|
| 学校名 | 広島県立広島中学校 |
| 校長名 | 番本正和 |
| 所在地 | 東広島市高屋町中島31-7 |
| H P | http://www.hcyuko.hiroshima-c.ed.jp |
| 学級数 | 12学級 |
| タイプ | |

1 研究の概要

(1) 研究主題

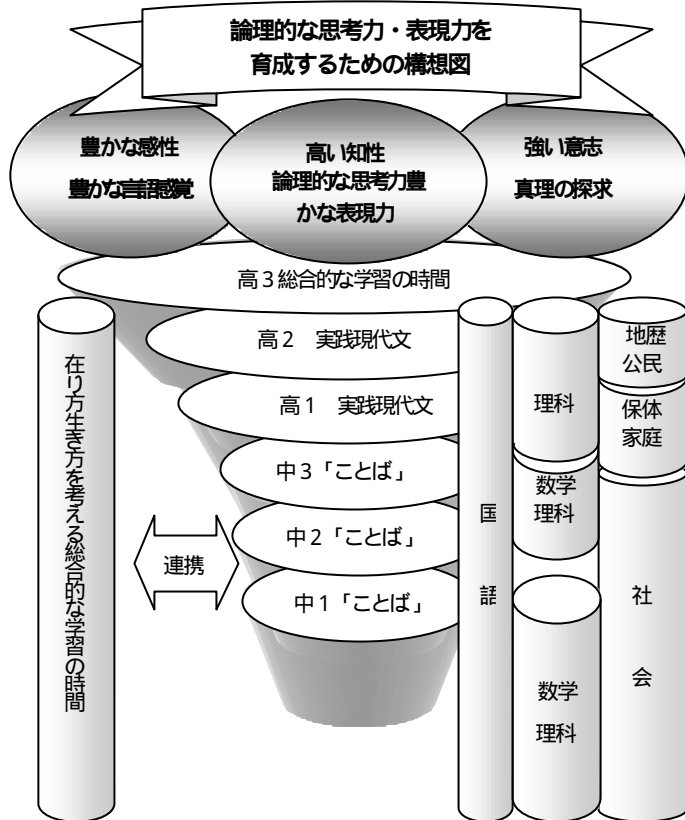
論理的な思考力・表現力を育成するカリキュラム開発
- 選択教科「ことば」の教材開発と評価方法の工夫 -

(2) 研究のねらい

ア 主題設定の理由

県立広島中学校・広島高等学校では、教育目標の一つに「グローバル化時代に活躍できる人材の育成」をあげている。様々な価値観や文化の中で、自分の考えを明確に持ち、それを相手に正しく効果的に伝える力の育成に向けて、中高の6年間で論理的な思考力・表現力を身に付けさせていく必要がある。

中学校では、併設型中高一貫教育校に係る教育課程の基準の特例も活用して、選択教科として「ことば」(その他特に必要な教科)を設定するとともに、高等学校1・2年次では国語科の学校設定科目「実践現代文」を開設、3年次での総合的な学習の時間で卒業研究を実施するなど、6年間を通して、計画的・継続的に論理的な思考力・表現力の育成を図るためのカリキュラムを作成している。本研究は、そのカリキュラムの開発に係るものである。



本校における「論理的な思考力・表現力」の定義

事象を多面的・多角的に考察し、その特徴を明らかにするとともに、その事象と他の事象との関連を見出

し、その事象の持つ意義を明らかにすることができる力。(個の内面において働く力)

論理的な思考を通して明らかになったことがらを説明するにあたり、まず全体構成を明らかにした上で、相手にとってわかりやすい言葉を用いながら、自分の意図することをより効果的に相手に伝えることができる力。(他者とのかわりにおいて働く力)

イ 生徒の状況及び課題

本校の生徒は、文章を書いたり発表したりするという点について苦手意識を持っている者の割合は少ない。しかしながら、入学者選抜における適性検査において、「相手の論の根拠をとらえて反対意見を主張する力」や「データを読み取り、分析し、解決策を表現していく力」などの「論理的な思考力・表現力」に係る点に課題があることがわかった。このことから、本校において「論理的な思考力・表現力」の育成は重要な課題である。

(3) 研究組織・体制

教務部カリキュラムマネジメント班を中心とし、選択「ことば」担当班、「論理的な思考力・表現力」理論研究班により実践・理論研究を進めている。

2 2年間の取組みの概要

実施教科・学年 選択 その他特に必要な教科「ことば」

第1, 2, 3学年 年間授業時数 35単位時間

a 基礎・基本としての「言語技術」の導入

論理的な思考力・表現力の育成にあたり、その基礎・基本として「言語技術」をとらえ、「言語技術」を繰り返しトレーニングすることによって、相手にわかりやすく伝える技術や分析の視点、議論の力等に活用していくこととした。その「言語技術」には、次のようなものがある。

対話と議論のための基礎技術.....「問答ゲーム」等
作文技術 ・説明..描写, 説明, 報告, 記録等
・論証..絵の分析, 論証文, 意見文等

これらを、「ことば」の授業の中でトレーニングする時間を設け、課題を用いて応用させていくように工夫した。

b 国語科と他教科によるT・T

すべての教科の核として考えるという観点から、国語科と他教科の複数の教員とがT・Tを組んで指導に当たることとする。そこにおける国語科の教員の役割は、主に取り上げる素材を活用しての話し合いや討論の指導、そしてそれを表現に結び付けていく指導である。一方、他教科の教員の役割は、主に素材の選定や発想の転換、思考のポイントなどを示していく指導であり、そうした視点からの発問や説明内容を考える。例えば、社会科の教員との授業では、次のような役割分担を行っている。

分析の対象資料(グラフ等)を選定する。 **社会科**
資料を生徒に示し、課題を設定する。 **社会科**
分析の観点を提示し、集団討論を組織・運営する。 **国語科**

分析・考察内容を発表する。 **国語科**
分析・考察内容に対する評価を行い、資料の解説を行う。 **社会科**
資料をどのように分析・考察するかポイントを押さえる。 **国語科・社会科**

c 中高6年間の発達段階に応じた素材・学習活動の工夫

指導に当たっては、中高6年間で「基礎充実期(中1・中2)」「探求期(中3・高1)」「発展期(高2・高3)」と設定し、その期ごとに「指導上のキーワード

ド」を設定する。これは、「発想の転換」「置き換えやモデル化」「自己の生き方との関連」を論理的な思考力を育成するために必要な中心的要素とし、それらを各期に位置付け、段階的な育成を図ろうとするものである。

<指導上のキーワードの定義>

| | | |
|------------------|----------------|---|
| 基礎充実期 (中1・中2) | 発想の 転換 | 事象を別の角度・立場・スケール等、今までの自分のスタイルとは異なる視点で考察すること。 |
| 探 求 期 (中3・高1) | 置き換えや モデル化 | 事象を別の事例に置き換えてとらえたり、象徴的なことばをとらえたりすること。 |
| 発 展 期 (高2・高3) | 自己の生き 方との関連 | 事象と自分とのかかわりや自分の立場を明らかにすること。 |

具体的な授業構想に際しては、「指導上のキーワード」を念頭に置いて、多様な素材や学習活動を工夫していくことになる。ここでの「多様な」とは、文章の素材が多様な分野にわたるといっただけでなく、視覚的な素材・教材や聴覚的な素材・教材を見付けたり、話し合ったり、討論、発表等の表現活動を通して発想の転換を図ったりする等の学習活動をも視野に入れる、ということを示している。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

論理的な思考力・表現力の育成過程をふまえたカリキュラムの開発とそれに基づく授業実践により、「ことば」は、学習者の「論理的な思考力・表現力」を高めている。

【データ1】

| 領域 | 内 容 | 肯定的回答の割合 | |
|----------------------------|---|----------|-------|
| | | 本校平均 | 県平均 |
| 論 理 的 思 考 力 | 物事を解決したり決めたりするとき、なぜそうなるのか理由を考えることができます。 | 77.2% | 60.8% |
| | 見たことや考えたことを、順序よく伝えることができます。 | 68.8% | 49.8% |

対象：平成18年度第2学年生徒154名「基礎・基本」定着状況調査 平成18年6月13日実施

【データ2】

| 質 問 項 目 | H17年4月 | H18年10月 |
|--------------------------|--------|---------|
| 物事を筋道立てて考えたり話したりすることができる | 32.5% | 97.5% |
| 根拠に基づいて自分の考えを話すことができる | 40.0% | 75.0% |
| 自分の考えを順序立てて表現することができる | 37.5% | 87.5% |

対象：平成18年度第2学年生徒160名 意識調査

【データ3】

| 評 価 項 目 | H17年1月 | H18年10月 |
|---------------------------------|--------|---------|
| 対象を多面的に分析し、その描写を順序立てて表現することができる | 52.5% | 87.5% |

対象：平成18年度第2学年生徒、平成17年1月入学者選抜適性検査 平成18年10月適性検査類似問題

データ1は、広島県教育委員会が6月に中学校第2学年を対象に全体的に実施した「基礎・基本」定着状況調査における「生活などに関する調査」の一部である。これによると、「論理的思考力」の領域における二つの項目における肯定的回答の割合は、いずれも広島県の平均を大きく上回っていることが分かる。このことから、生徒は、論理的に考えることや表現することに対し、力が付いていると実感しているということが言える。

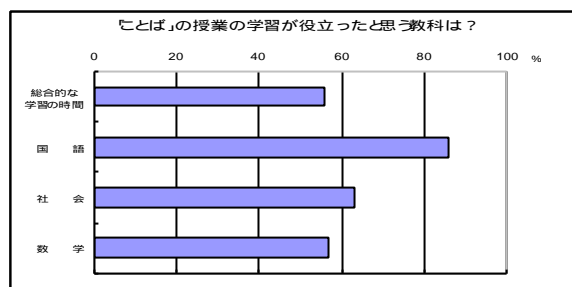
データ2は、4月当初、第1学年の生徒に対し、課題について多面的に考え、それを相手に伝えるという学習活動を行った後、調査したものと同じ内容の調査を、翌年10月に再度実施した結果である。

データ3は、「対象を多面的に分析し、その描写を順序立てて表現することができる」力に関して、「ことば」の学習を行う前（入学者選抜時）とその1年半後における学力との比較である。

データ2、3からも、「ことば」の授業が、学習者の「論理的な思考力・表現力」を高めていることがわかる。

「ことば」において、国語科と他教科との教科横断的な内容を、「言語技術」を意識しながら分析したり、議論したりする学習が、必修教科の学習にも良い影響を与えている。

【データ4】



対象：平成18年度第2学年生徒155名 意識調査 平成19年3月実施

データ4は、平成19年3月に実施した第2学年の意識調査の結果である。これによると、60%程度以上の生徒に「ことば」の授業で身に付けた力が役に立っていると答えた教科が4教科見られた。生徒からは次のような意見が挙げられている。例えば、総合的な学習の時間では、「説明する力や要約する力が調べた内容をみんなの前で発表するときに役に立った。」数学では「図形や証明問題を考えるときに論理的な考え方が役に立った。」社会では「グラフや表を見てその資料が何を示しているのかなどが考えられるようになった。」などの意見が多く見られた。これらのことから、「言語技術」を意識しながら分析したり、議論したりする学習が、必修教科の学習にも良い影響を与えているということがわかる。

(2) 課題

ア 「論理的な思考力・表現力」に係る生徒の学力の変容をより具体的に見取っていくための評価方法を検討する必要がある。

イ 長期的な視点で、「論理的な思考力・表現力」を育成していくために、3年間（6年間）の系統的な指導計画の検証と改善・充実を図っていく必要がある。

(3) 今後の改善方策等

ア 「ことば」を核とした論理的な思考力・表現力を育成するカリキュラムを充実させる。

イ 論理的な思考力・表現力を高める教材を開発する。

本校の特色ある教育課程の中身が完成した。そして、生徒全員に選択させる価値の高いことが実証された。今後も継続し、さらにカリキュラム、教材開発の充実を図っていく。